



# 浦島伝説

## 友、旅立ちの時

### ♪同じ空の下 どこかで僕たちは いつも繋がっている

平成26年3月14日。卒業生129名は、この歌を歌って“あの空へ”羽ばたいていきました。

卒業証書授与では、学級担任の呼名に対して、大きな返事が体育館に響き渡りました。「ありがとう」と「さようなら」の気持ちがこもった「ハイ」という返事に、3年間の成長を感じ取ることができました。

また、1・2年生も立派でした。前日の準備、卒業式当日の厳粛な雰囲気、心のこもった合唱、そして手際よい後片付けと、しっかりと卒業生を支えてくれました。みんなで創り上げた素晴らしい卒業式でした。

卒業の饒として、「名言を語れる人に」という話をします。

昨年9月7日、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスでのIOC総会で、東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定されました。この大きな原動力は、招致委員会メンバーの個性豊かで熱意あふれる英語やフランス語によるプレゼンテーションでした。東日本大震災復興支援への感謝の意を込めた高円宮久子様や、「おもてなし」で一躍人気となった滝川クリステルさんのスピーチは圧巻でした。

しかし、私は、最後のプレゼンターであった佐藤真海さんのスピーチが一番素晴らしかったと思います。なぜなら、彼女だけが「日本の素晴らしさをアピールする」というより、「自分の生い立ちや体験、スポーツへの愛情と情熱」を魅力的に語り、多くの人を共感させたからです。

冒頭、彼女はこのように語り始めます。

「And I'm here because I was saved by sport. It taught me the values that matter in life. (私がここにいるのは、スポーツによって救われたからです。スポーツは、私に人生で大切な価値を教えてくださいました)」。スピーチ全体の結論を、簡潔で見事に言い切った名言であると思います。

この後、早稲田大学在学中に骨肉腫になり、わずか数週間で右足を失い、絶望の淵に沈みながらも陸上競技に取り組むことで乗り越えたこと、東日本大震災で自分の町が津波に襲われたこと、その復興支援に多くのアスリートが取り組む姿を見てスポーツの力のすごさを実感したこと、などを語っていきます。赤裸々な自身の体験やスポーツへの思いには、オリンピック招致より、一人の人間としての懸命な生き方が表現され、聞く者を引きつけずにはおかない魅力がありました。

スポーツに限らず、いかなる分野においても、苦難を乗り越えて懸命に生きる人の語る言葉には、年齢や立場など関係なく、人を感動させ、奮い立たせ、前を向いて生きようとする意欲や勇気を与える力があります。

「そうだ。そのとおりだ。私もがんばれる」。この思いを湧き起こす言葉、これこそが“名言”なのです。

みなさんには「人を励ますことのできる説得力のある名言を語れる人」になってほしいのです。そして、励まされるだけでなく、真剣で誠実な生き方を通して自然と生まれてきた言葉で、人を激励できるようになってほしいのです。名言を語れるということは、自分がかんばった結果として、「幸せを実感している」と言い換えられます。その「幸せのおすそわけ」ができるとは、なんと素晴らしいことではありませんか。

たとえ十代であろうと、生き方次第で人を引きつける言葉を語るすることができます。どうか心豊かにたくましく生きる人生であってください。大いに期待しています。

(※卒業式校長式辞から一部抜粋)



♪卒業記念合唱『友 ～旅立ちの時～』